

足羽更生園では週2回クラブ活動を行い、利用者の方それぞれが余暇を楽しんでいます。
今回は習字クラブについて、講師の小林信恵先生にお話を伺いました。

これまで障害を持つ人との交流のなかった私が、初めて足羽更生園を訪問したときの衝撃は大きく、今も印象に残っています。利用者支援スタッフの苦労や、障害に対する関心、利用者の方々の環境や支えている家族の方々など、さまざまな思いが、習字クラブの講師をお引き受けする決意を後押ししてくれました。

6人のメンバーそれぞれの個性に慣れ、お互いが自然に接することができるようになるまでに少しの時間がかかりました。「書」を通して障害を持つ人とのかわりとなる、経験がないだけに今も不安です。何年もの間、週2回のクラブ活動を通して習得されたことを基にもっと「書」の技術を向上させるにはどうすれば良いのだろう。回を重ねるごとに思いは強くなるのですが、障害者に対する知識のない私は暗中模索です。しかし、一般的な「書」の表現に対する評価の概念を広

く大きな範疇はんちゆうでとらえると、もうすでに、彼らの書がとても魅力的です。すてきだと気が付くなり、明るい気持ちになり嬉しくなりました。そして文字を正しく美しく表現する習字としてではなく、見る人の感性、情感に訴える芸術の「書」としてとらえてみると、とても素晴らしいということに気が付きました。



大島さんの書は文字ではなく、前衛書ぜんゑいである。多様な表現で楽しい。「晴れた日の私の心」？「草原のそよ風」？イメージは広がる。彼女はニコニコしながら、リズムを取りながら、楽しいうれしいの極致の表情である。

書を通して心をつなぐ

— 習字クラブ —



山下さんの書は力強い。見る人の心をひきつけるパワーがある。デフォルメされた大胆な造形はエネルギーにあふれていて彼の個性そのものだと思う。



尾野さんの書は、篆書せんしょのよきな線が特徴で画数の多い文字の曲線、直線を正確に書き写して、好感度満点。



安達さんの書の一見弱々しい線からあふれる優しさ、いやしの造形は、見る人をほのぼのとなごませてくれる。



宮越さんの左右に開く線ののびのびした行書風の書は揺れるようなリズムの中に自由な開放感があつて、おおらかな。



近江さんはなかなか筆を持つてくれないのだけれど、気分乗ったときの書は、控えめな造形に空間の取り方が素敵で、文字の意味のイメージを無限に広げる力がある。

それぞれの「書」に「ステキ」を感じる柔らかな感性をもって関わり、私自身が刺激される心地よさを堪能したい、時間をかけながら、彼らのこだわり、個性に寄り添うようにして、新しいことに挑戦したいと思っています。そして、園外の人（社会）にも彼らの「ステキ」をアピールするチャンスがあるとうれしいと思っています。

六名の方の作品は広島県安芸郡熊野町の「ふれあい書道展」にて九月中旬より展示される予定です。

足羽更生園編

秋の楽しみ(利用者)

「朝倉遺跡祭りに行くのが楽しみです」

「昔はよく秋に山登りをしたので、久しぶりに登ってみたい」

秋の思い出(職員)

「小さい頃、家族は稲刈りが忙しく、なかなか帰ってこないし、外はすぐに暗くなつて怖いし、寂しかった思い出がある」

「軽井沢に行った帰りに、浅間山のふもとを通って帰った。山の斜面が一面、紅葉で真赤に染まっていてとてもきれいだった」

「秋に結婚したので、思い出深い」

